

**第二回全日本高校模擬国連大会**  
**明石康氏基調講演**  
**「国連とは何か―高校生に向けてのメッセージ」**  
**2008年11月8日**  
**於：国連大学本部（エリザベスローズホール）**  
(注：講演は英語で行われた)

1. はじめに

今日は、皆さんに英語でお話することにした。私は、大学2年生になるまでアメリカ人に会ったことすらなく、英語は未だに日本なまりである。しかし、国連ではそれぞれの国の人々が、自国なまりの英語を使って、立派に自分の意見を述べている。国連の英語は、「アメリカ英語」でも「イギリス英語」でもなく「国連英語」ともいうべき特殊な英語が使われているが、それでもお互い十分にわかり合い、英語を交渉の道具として使っている。

私は歴代の国連事務総長に仕えたが、いずれもかなりのなまりがある英語やフランス語を使っていた。しかし、自分の考えの98%はきちんと表現していたと思う。なまりは強すぎると困るが、そうでなければ大丈夫である。むしろ、懸念や希望などのニュアンスまで理解することこそ、一番大事である。新聞やテレビでは、外交はなんとなく冷たく形式的ではないかと受け止められているが、実は大変人間くさい仕事である。人間の心の機微まで理解する必要があることは、日々の生活とあまり変わらない。

本論に入る前に、皆さんが学校の勉強やスポーツ、趣味などで忙しいにもかかわらず模擬国連に参加されたことに、感謝の気持ちを伝えたい。また、外務省やメリルリンチ日本証券をはじめ、多数の後援団体、協賛団体に謝意を表したい。

2. 国連の問題は日本自身の問題

昨今、世界における日本のプレゼンスやイメージは低下している。1960～70年代には、日本は多くの国にとって後を追うべきモデルであった。しかし、90年代初頭にバブルがはじけてから、日本人自身ですら、この国はどこにいくのか、世界やアジアにおける役割は何か、考え込んでいる。このような中で、私は高校生の皆さんに、国際関係、特に国連への理解を深めてほしいと思っている。

国連の問題は、我々日本自身の問題でもある。国連は、日常生活から遠いものではない。今回のテーマである子ども兵の問題を含めてである。今、世界は大きな金融危機に直面している。米国から始まり、欧州やアジア、日本まで巻

き込んでいる。11月15日、世界の主要20カ国の首脳が集まる。問題は世界大のため、解決も世界大である必要がある。世界には様々な問題がある。戦争と平和、特に人種や民族に起因する紛争。貧困。地球温暖化。核兵器を含む大量破壊兵器。SARSなどの感染症。海賊は、本の中の存在ではなく、実際にソマリア沖で通商を阻害している。世界に存在する様々な脅威は、我々の日常生活から遠いものではない。いつでも我々を脅かしうるものなのだ。

子ども兵についていえば、私の仕事の一つは、スリランカの民族問題を解決することである。子ども兵は、政府と反政府（タミールの虎）の双方にいる。要員が少ない中、子どもは動員しやすく、感化することも簡単だ。非人道的なことも、容易に習得させることができる。しかし、子ども兵の心の傷は簡単に癒えない。このような問題を、これから2日間で議論してほしい。

### 3. 理想と現実の間にある国連

そして、国連の性格について、考えを深めてもらいたい。新聞やテレビでも、国連について様々な議論が行われている。しかし、国連とは一体何だろうか。日本は1933年に国際連盟を脱退した。満州侵略を非難されて、日本は怒り、不満を抱いたからである。23年後の1956年、日本は国連に戻った。その後日本は、国連を通じて世界の平和と繁栄に向けての努力に参画してきた。

特に冷戦後、国連を理想化する議論がある。日本が世界に貢献し、戦争や国際紛争をなくすためには、国連が全てを決めることが望ましく、国連こそ最も重要で有効な外交のツールであるという立場である。その一方で、国連は議論するだけで役に立たないという議論がある。オバマ氏やケネディ氏のような立派なスピーチは行われるが、192か国が議論しても物事は決定できず、決定しても妥協の産物で、内容が薄められた結論にしかかなり得ない。従って、役に立たないどころか却って害になり、しかも金がかかるという見方である。真実は、その中間のどこかにある。

先週、私はモンテネグロで講演を行った。モンテネグロは昔のユーゴスラビアの一部であり、最新すなわち192番目の国連加盟国である。私はこう述べた。「国連は未だ不完全な道具である。しかし、平和・開発・人権を世界に実現するための、人類にとって不可欠な道具である。192か国が交渉すれば、当然時間がかかる。文化や歴史、そして置かれた状況が異なるからだ。その中で、対立が生じ、交渉や妥協が行われ、コンセンサスが形成される。これは、世界にとってあるべきモデルである。」

国連は、加盟国とは異なり、自らの軍や警察を持っていない。税金を直接徴収することもできず、加盟国の分担金に頼っている。国連事務総長は外交上重要な役割を果たしているが、限界がある。現在、国連事務総長は、韓国出身のパンギムン氏が務めている。彼は韓国の元外務大臣であり、勉強家で努力家、冷静・中立で思慮深い。事務総長の略語であるSG (Secretary-General) につ

いて、私はまだ韓国の外相だった彼に、国連SGとは挫折感のかたまりなので、それはスケープゴート（scapegoat）を意味すると述べておいた。国連事務総長は、世界の全ての問題を正す権威も権限もないので、彼を批判するのは不条理である。私も40年間の国連勤務のうち18年間は事務次長を務めたが、同じことを実感した。国連に非現実的な責任を負わせるべきでない。しかし、国連は柔軟でダイナミックな道具であり、より良い世界の実現に向けて十二分に活用し得る。

国連は幾つかの異なる顔がある。加盟国のクラブとして、ある時は一致した声を上げ、世界の良心を示すこともあるが、多くの場合あいまいな立場を示す。ニューヨークでは、国連は外交官の集まりであるが、アフリカや中東などの途上国にいくと、技術協力を担う諸機関や平和維持活動（PKO）がある。これらは、現場で人々の生活を良くするために、個別的・具体的な仕事をしている。そして、成功することも失敗することもある。

私が国連事務総長特別代表として担当したカンボジアのPKOは成功した。その後担当した旧ユーゴでは、日本から一人も自衛隊が参加せず、また平和を達成できなかった。そこで痛感したのは、PKOは平和を維持するためのものであって、平和を創造できないということである。それは、国連の持つ限界である。国連は、世界政府でも世界連合でもない。独立国の集まりであり、不完全な社会にすぎない。

それでも、近年の国連では重要な進展が見られる。ジェノサイドなど人道に対する罪は許されず、一義的には加盟国政府の責任だが、政府がそれを果たせない場合には国際社会がその責任を果たすという「保護する責任」が認知されつつある。また、2000年には加盟国首脳がミレニアム開発目標（MDGs）に合意している。国連は、完全でも万能でもない。しかし、国連がもたらす貴重な機会、様々な成功や失敗から学び、活かしてほしい。

#### 4. おわりに

以上、皆さんに国連の基本的な特色と性格について説明した。皆さんが、国連の持つ希望と限界、そして理想と現実の姿について、バランスのとれた認識を持っていただければ幸いである。

#### 【質疑応答】

（質問1）国連において、日本が更に貢献できることは何か。

（回答）まずは、より多くの自衛隊員・警察要員をPKOに送ることである。国連PKOへの軍事・警察要員の派遣数を見ると、日本の順位は82位である。これは、誇りにできない数字である。より多くの日本人が、国連PKOへの積

極的な派遣に賛成することを望んでいる。

第二に、経済協力である。日本のODA額は、最近まで米国に次ぎ2位だったが、今は5位にまで落ちた。しかも、人口一人当たりで考えれば、日本は0.2%と、国際目標の0.7%に遠く及ばない。この数字は、スカンジナビア諸国やオランダなどは既に達成している。

これを見れば、日本は、内向きで消極的で臆病で利己的な国であると言わざるを得ない。

(質問2) 日本経済は厳しい状況だが、それでも国連やユニセフなどにもっとお金を出すべきなのか。

(回答) 先進国を含む世界中の国が、金融危機で悪影響を受けている。日本を含む主要20カ国が11月15日に集まり、他の取組も進められる。金融問題について、これらの諸国が十分な能力と意思をもって解決に当たることを望んでいる。米国は、市場経済が最良の解決策であると主張してきたが、政府による全面的な介入が必要と主張する国もある。真実はその中間にあり、緊密な協調により適切な解決を出すべきである。

1930年代と同様に、世界にとって受け入れられる新たなシステムを構築することが万人の利益である。複雑な交渉を踏まえて。最終的な解決策が見い出されるべきだ。誰もが知恵を出せば回答が見つかるはずだ。それを達成するために、我が国も懸命に取り組み、経済力を回復し、国連の分担金、ユニセフなどへの拠出金も応分に出すべきだと考える。

(質問3) 国連PKOは、平和を維持するものであって創造するものではないとのことであるが、平和を実現するためにどのような解決策があるのか。

(回答) 国連PKOには3つの原則がある。第一に、全ての紛争当事者が国連の関与を望むという同意原則。第二に、国連がいずれかの一方の肩を持つてはいけないという不偏性。第三に、戦闘に参加しないが最低の自衛力行使は認めるといもの。旧ユーゴでは、「二重の鍵」というシステムを採用した。国連事務総長特別代表の私とNATO最高司令官の双方が鍵を持ち、双方が同意すれば空爆を実施できるというものである。私は、空爆が目的達成に不可欠で、一般市民への被害がない場合のみ認めた。米国からは慎重すぎると批判されたが、私は国連事務総長の全面的な支持を受け、正しい判断をしたと考えている。しかし、本当の戦闘においては、勝利しなければならず、そのためには武器も強くなければならない。

国連PKOは、基本的に、限定的な平和や停戦を維持するためのものであり、戦ってまで平和を創り出すことはできない。最近、多くの経験を積み、より積極的なPKOがコンゴ民主共和国やレバノンで生まれているが、冒頭述べた3つの原則は、未だに維持されている。

(以上)